神坂雪佳の作庭とその意義について

小 野 健 吉*

The significance of gardens designed by Sekka Kamisaka

Kenkichi ONO

摘要：明治中期～昭和初期にかけて京都を中心に多岐にわたる分野で活躍した日本画家・神坂雪佳は、庭園にも関心を示し、設計にかかわった大橋氏松ヶ崎別邸（無盡庵）庭園では雪佳らしい特色も出した庭園意匠を見せている。この時期、雪佳のほかには竹内栖鳳、橋本関雪らの画家も庭園に関心をもち、自邸の庭園を作っている。そしてこれらの画家の庭園への関心が、この時期の京都の庭園の水準を引き上げる要因の一つであった。

1. はじめに

明治から大正、昭和初期にかけては、日本画の隆盛期とも言える時期で、京都においても数多くの日本画家が活躍し、いわゆる京都画壇を形成した。こうした状況のもとで日本画家は当時の有産階級との交流を深めるとともに、経済的にも裕福となり、広大な邸宅を営む者もあらわれた。京都画壇を代表する画家の一人である竹内栖鳳（元治元・1864～昭和17・1942）は東山山麓の高台寺に本邸を、嵐山をのぞむ嵯峨の地に別邸・霞中庵を営んだ。また竹内栖鳳の弟子であった（後に訣別）橋本関雪（明治16・1883～昭和20・1945）は銀閣寺にほど近い浄土寺石橋町に白沙村荘を開いた。そして、これらの邸宅には当然、庭園も作られた。竹内栖鳳や橋本関雪は庭園についても人まかせにはせず、自らが指揮監督して作庭を行った。橋本関雪は「庭園を作り、家を築くも一つの創作とし見れば、吾が居も又た過渡期に於ける習作に過ぎざるなり。」¹⁾と述べ絵画に対するのと同様の庭園に対する心構えを吐露している。

神坂雪佳（慶応2・1866～昭和17・1942）は、今日、竹内栖鳳や橋本関雪ほど人口に膾炙されることのない画家であるが、当時は絵画・工芸・芸術関係出版など多方面にわたる活躍でよく知られていた。そして庭園についても、明治39（1906）～42年（1909）に知人であった大橋正之助の松ヶ崎別邸・無盡庵庭園（以下、「無盡庵庭園」という）の設計にかかわり、昭和13年（1938）には京都西郊、嵯峨の自邸にも自らの指揮監督で庭園を築いている。自邸のみではなく、依頼されて作庭にかかわっている点及びこの無盡庵庭園の作庭時期が、竹内栖鳳の霞中

庵（大正元・1912～）、橋本関雪の白沙村荘（大正5・1916～）などの庭園に先立っていることは、先にも述べたように神坂雪佳の多方面にわたる創作力を示している。本論では、この神坂雪佳の作庭について、主として無盡庵庭園から考察していくとともに、京都の近代庭園史上におけるその意義について言及していきたい。

2. 神坂雪佳の経歴と業績

神坂雪佳は、慶応2年（1866）1月12日、御所に仕える武士であった神坂吉重とシゲの間に長男として京都で生まれ、吉隆と名づけられた。少年期を東大路三条周辺で過ごした雪佳は、明治14年（1881）鈴木瑞彦（弘化4・1847～明治34・1901）に入門し、四条派の画法を学んだ。瑞彦は、明治京都画壇の基礎をつくった塩川文麟（享和元・1801～明治10・1877）に師事した画家で、当時、相当高く評価されていたようである。四条派は、一般に円山派とともに写生派といわれるが、円山派が写生する対象物に主体性を置くのに対し、写生する画家の側に主体性を置くのを特徴とし、瑞彦のもとでこの四条派の技法を学んだことは、後の雪佳の芸術の展開に大きく影響を及ぼすことになったと考えられる。

明治21年（1888）、23才の雪佳は、長州藩出身の政治家・品川弥二郎との出会いにより、大きな転機をむかえる。雪佳と品川弥二郎との出会いの契機については不明であるが、その間に後述する稲畑勝太郎（文久2・1862～昭和15・1940）、更に明治初期に京都府知事であった榎村正直を介在させると説明がつく²⁾。すなわち、雪佳と稲畑勝太郎は幼なじみで、終生の交流を続けた仲であり、

* 京都市文化財保護課

その勝太郎はフランス留学(明治10・1877~明治18・1885)にあたって当時の京都府知事・榎村正直と密接なつながりを作っていた。そして榎村正直と品川弥二郎は、ともに長州藩士として維新の戦いに加わっており、面識交流があったわけである。ともあれ、前年ヨーロッパから帰国したばかりであった品川弥二郎との出会いは、雪佳に、図案や工芸など絵画以外の方面への目を大きく開かせることとなった。このことについて『雪佳遺作集』(昭和19・1944)の年譜は「装飾芸術に関する説を聞き大に得る処」があったと記している。

明治23年(1880)、雪佳は、図案家・岸光景に師事して、各種工芸の組織や意匠図案の制作法を学びはじめる。また琳派の研究もこの頃から始めている。明治26年(1893)には光景、金子錦二とともに、榊原文翠、菊地芳文、竹内栖鳳、谷口香嶠、三宅呉曉らの賛同を得て芦手絵会を結成。明治29年(1896)には京都漆工会主催第一回競技会の審査員に選ばれ、また京都市立工芸図案調製所の主任になるなど、雪佳の存在は人々に認められるようになってくる。

明治31年(1898)には京都美術協会雑誌の編集者となり、出版界においても活躍する。このような活動は、雪佳の巾広い視野を示すとともに、逆にそのことによって雪佳の視野や交際範囲が広がられたとも言え特筆すべき点である。明治33年(1900)には京都市立美術工芸学校図案調製部技師となり、またこの年、英国王室の内装用蒔絵飾棚の意匠図案を制作している。

更に明治34年(1901)7月、雪佳はイギリスのグラスゴーにおいて開催された博覧会視察に向けて日本を発っている。この洋行はヨーロッパ各国の工芸図案の調査も兼ねていたが、この頃のヨーロッパは「美術館や画廊のなかの芸術ではなく、ポスターから地下鉄の飾り金具にいたる街の芸術」³⁾であるアール・ヌーヴォーの全盛期であり、巾広い興味を持つ雪佳には極めて有益な旅であったと考えられる。例えば博覧会の開催されたグラスゴーは、「スラムをとり除こうとする都市政策がいちはやく着手され」「公共事業や文化・芸術への関心が市民の間で高かった」³⁾都市であり、アール・ヌーヴォーの代表的建築家の一人であるチャールズ・レニー・マッキントッシュ(1868~1928)が克蘭ストン喫茶店シリーズなど建築をはじめとする多様な創作活動を行っていたのもその頃のこの都市であった。

雪佳は翌明治35年(1902)1月に帰国するが、その直後から彼の業績は急激に増加する。同年、宮脇売扇庵の天井に扇面画「浪」を制作。明治36年(1903)第5回内国勧業博覧会に漆器や染物を出品、入賞。同年、浅井忠、中沢岩太とともに陶磁器の制作を楽しむことを目的とした「遊陶園」という趣味団体を設立、清水六兵衛(5代)などの参加を得ている。明治37年(1904)には第9回新

古美術展の審査員兼鑑査員に任命され、彫刻部・織物部・漆器蒔絵部・七宝部・金属部・各種工芸部・図案部の審査・鑑査を行っている。更に京都市立美術工芸学校教諭に任ぜられた明治38年(1905)には天洋丸、地洋丸という二隻の客船の内部各室の装飾にたずさわっている。そして明治39年(1906)から同42年(1909)にかけて築造された無盡庵庭園の設計にかかわることになるのである。

帰国からこの時期にかけての雪佳は、このように世間の評価を不動のものとするとともに、洋行による刺激をその一因として極めて多彩な活動を見せている。明治40年(1907)第6回の関西美術展へ「ヌーボー式模様菓子盆」を出展したこと、フランスのサロンにならって一流の画家の作品を展示する優待室が設けられた同年の新古美術展において、その優待室に竹内栖鳳、菊池芳文、山元春挙らとともに「婦人図」を出展したことは、象徴的な出来事と言えよう。

その後も、雪佳は多方面にわたる活躍を見せる。これ以後の雪佳については、『神坂雪佳画囊』(昭和57・1982)から抜萃して以下に記す。

- 明治42(1909) 美術工芸の研究会・佳美会を創立。
(後に佳都美会となる。)
- 明治43(1910) 競美会を設立。
宮崎・婚儀用具研究会の設立に参加。
- 明治44(1911) 弟・松濤とともに矢田虎之助邸の襖に天平風の「狩図」を制作する。
- 明治45(1912) 競美会と佳都美会とを合併し、佳都美会と称した。
- 大正2(1913) 第1回図案及び応用作品展の審査員となる。
光悦会を設立。
御大礼献上の金蒔絵冠棚・文台硯箱の図案制作の監督になる。
- 大正3(1914) サンフランシスコ万国博覧会の鑑査官となる。
- 大正4(1915) 宮崎「画伯考案書棚展覧会」に出品する。
- 大正7(1918) 青蓮院・叢華殿の襖絵を制作する。
図案及び応用作品展を工芸博覧会と改称、審査員になる。
- 大正8(1919) 佳都美会の組織を改め佳都美村とする。
久邇宮御殿の装飾に金地大額「四季草花図」を制作する。
- 大正10(1921) フランス・サロン日仏美術交換会の京都工芸鑑査特別委員となる。
- 大正11(1922) 従6位に叙せられる。
- 大正12(1923) 東宮大礼に京都市より献上の蒔絵飾

- 大正13 (1924) 棚図案・巻物金銀泥絵を制作する。
佳都美村を改称し京都美術工芸会
(美工院)を組織、全国より作品を
公募する。
宮崎・婚儀道具(婚儀調度一組)を
制作。
- 大正14 (1925) 色漆絵の研究を始める。
- 大正15 (1926) フランスよりオフィシェー・カンボー
ジュ勲四等章を受ける。
- 昭和3 (1928) 「楽未央帖」を制作する。
- 昭和6 (1931) 宮崎・家具工芸研究会の結成。
- 昭和8 (1933) 伏見宮家に「四季草花図」屏風二双
を制作する。
- 昭和10 (1935) 京都漆芸会創立、顧問となる。
- 昭和11 (1936) 京都市美術館評議員となる。
- 昭和12 (1937) フランスよりオフィシェー・カンボー
ジュ勲三等章を受ける。
伏見宮新邸の食堂装飾図案を制作。
- 昭和13 (1938) 嵯峨野会を創立する。
- 昭和15 (1940) 高野山金剛峯寺に下賜の陛下直筆
「額」の表装外箱装飾図案を制作す
る。
- 昭和17 (1942) 1月4日没、光照院賢善祥観雪佳居
士。

このうち雪佳の庭園へのかかわりあいを考えるうえで
注目すべき事柄は、大正2年(1913)の光悦会の設立と
昭和13年(1938)の嵯峨野会の結成すなわち嵯峨有栖川
への転居である。

光悦会は、雪佳が光悦寺の前田日延住職や高島屋の飯
田新七らとともに発起人となって、桃山時代から江戸時
代初期にかけて活躍した芸術家・本阿弥光悦(永禄元・
1558～寛永14・1637)の事跡を顕彰するために設立した
会である。雪佳は、本阿弥光悦から俵屋宗達、尾形光琳
へと連なる琳派の研究を行い、琳派から強い影響を受け
たが、ことに本阿弥光悦には傾倒していたようである。
このことは、自らが編集していた雑誌『京都美術』第37
巻(大正4・1915)に掲載した「光悦の芸術」と題する
随想によくあらわれている。「光悦の芸術は実に世界無比
である、絶体である、書画に於て、蒔絵に於て。其他凡
ての美術に於て。」という冒頭の部分で、その傾倒ぶりが
十分うかがえる。雪佳自身の多方面にわたる芸術活動も、
本阿弥光悦を目標としたことによるとも考えうるほどで
ある。そして同じ随想の中で「(本阿弥光悦が)庭も作っ
た事は本法寺の巴の庭で分るし又之に関する手紙も残っ
て居る。」と述べており、その手紙を雪佳自身が所蔵して
いた⁴⁾ことから、雪佳も庭園に対して相当な関心を持っ
ていたことがうかがえる。なお、この手紙は『光悦』(大
正5・1916)に写真と解説が掲載されているので以下に

記す。「明日人足十人にてても御合力可有候飛石を今日見
に参候とり申と申度候此時專一にたのみ入□□恐惶かし
こ・朔日・光悦(花押)・神□様人々御中」。

次に嵯峨有栖川への転居であるが、西高瀬川の畔、西
南に嵐山をのぞむこの地に屋敷を開くにあたって、雪佳
は庭園を作っている。茅葺の主屋南側のそれほど広くな
い庭に西高瀬川から水を引き入れて流れとし、築山を築
くなど、晩年においても雪佳の庭園に対する関心が衰え
ていなかったことを示す例となっている。

3. 稲畑勝太郎、小川治兵衛との関係

明治～昭和初期にかけての京都の造園界におけるひと
きわ大きい存在は、小川治兵衛(万延元・1860～昭和8・
1933)通称「植治」である。「植治」の業績は、あらため
て述べるまでもないが、無鄰庵、平安神宮をはじめ数々
の別荘庭園の作庭を手がけ、ことに南禅寺界隈別荘庭園
群の作庭においては自らの作庭スタイルを構造化してま
さに一時代を画した⁵⁾ことが挙げられる。

雪佳が大橋正之助に依頼されて無盡庵の作庭に参画し
た明治39～42年は、「植治」が旺盛な作庭活動を行って
いた時期であり、雪佳も当然「植治」の作庭に関心を持っ
ていたはずである。そして、この2人は、稲畑勝太郎を
つうじて面識があったものと考えられる。

稲畑勝太郎は、雪佳の生まれる4年前の文久2年(1862)
和菓子舗「亀屋正重」を営む利助、みつの間に京都・烏
丸御池で生まれ、慶応元年(1865)雪佳の生家にはど近
い三条大橋東入西海子町に移っている。そして明治10年
(1877)、京都府からフランス留学生に選ばれ、明治18年
(1885)に帰国するまでフランスで染色を学んでいる。
帰国後は京都府、京都織物株式会社などを経て、明治23
年(1890)「稲畑商店」を設立し、染色業にたずさわった。
明治33年(1900)、「此年北清事変に鑑み、カーキ染色
を我軍隊被服に適用するの必要を認め、此れが研究に着
手」⁶⁾したが、この軍隊被服へのカーキ染色で成功し
て巨万の富を得、その後、関西実業界の重鎮として昭和
15年(1940)に没するまで活躍を続けたわけである。そ
して雪佳との交流も終生変わることなく続いており、そ
のことは昭和13年(1938)に稲畑勝太郎翁喜寿記念伝記
編纂会によって刊行された『稲畑勝太郎君伝』の雪佳の
挿絵が14図挿入されていることからわかる。

カーキ染色によって成功した稲畑勝太郎は、明治38
年(1905)、「もと南禅寺の境内に属し、一塔頭のあとで
あると伝へられる」「東山三十六峰の一端龍山の麓に位
し洛東の名刹南禅寺の南」⁶⁾の地(現在・京都市左京区
南禅寺福地町)に別荘(後に本邸)和楽庵を営んだ。和
楽庵の庭園は、この一帯の他の多くの庭園と同様に、「植
治」の手になるもので、作庭当初から評判が高く、築造
後数年を経ただけの明治42年(1909)に発行された『京

華林泉帖』にも掲載され、以下のような説明がつけられている。「南禅寺疏水水道の下天授庵の南にあり山岨を包ねて地盤頗廣く樹林蒼蔚たり山下に池を掘り奇石を疊み飛泉を作り池中に注き橋を架し水亭あり池中に架して之を作り以て瀧に對す其南に石を疊み細溪を作り流水を激して瀉き下らしめ折れて溪流となり西に下る又正門の内に亭榭を立て細流を引きて之を回らし岡山後楽園に倣ふ北に小亭あり又其北に新に茶室を設く其水量の多き此辺の別邸に冠たり聞く近日更に改築の挙あらんとす」。⁷⁾

雪佳がこの和楽庵を訪れたことが記録されているのは、大正6年(1917)5月20日聴鵬会に列席したときで、「二十日夜京都南禅寺畔邸で、陶庵西園寺侯を主賓とした聴鵬会が催された。陪賓の顔觸れは馬淵京都府知事、林大阪府知事、鈴木馬佐也氏、内藤湖南博士、武田五一博士、山元春挙、神坂雪佳の両画伯で、竹内栖鳳、都路華香両氏も出席の筈であったが、病気で不参」⁶⁾とある。雪佳と稲畑勝太郎の関係からして、雪佳はこれまでに幾度となく和楽庵を訪れていたものと考えられ、おそらく明治38年(1905)の作庭時からこの庭園にかかわっていたものと推測される。『京華林泉帖』の記述からもうかがえるように、琵琶湖疏水から水を導入して、滝、流れ、池など水の演出を見せ、庭園の一隅に茶室を築いて付近を露地風に処理するなど、この庭園も「植治」の南禅寺界限別荘庭園群のスタイルを持っている。しかし、この庭園には「植治」の他の庭園には見られない洞窟があり、これはフランス生活の長かった稲畑勝太郎の考案によるものであろうが、彼と親しく、美術的側面の相談相手・助言者としてブレン的な存在(以下「美的ブレン」という。)でもあった雪佳もこの庭園の意匠に何らかのかかわりを持っていたことは十分考えられる。明治38年(1905)といえば、大橋正之助から無盡庵(明治39年から工事に着手)の作庭意匠を依頼されていた頃と考えられ、雪佳の庭園に対する関心もひととき高かったはずである。したがって、この和楽庵作庭時に雪佳が「植治」と面識

を持ち、「植治」の作庭手法に接するとともに、逆に施主側の美的ブレンとして「植治」に影響を与えた可能性は高いわけである。

4. 無盡庵庭園

大橋家は、京都で染呉服卸商を営んでいた商家で、明治16年(1883)に発行された京都の商工案内書である『都の魁』にもその名が見える。

京都・烏丸仏光寺下るに本宅のあった大橋正之助(初代)は、明治39(1906)~42年(1909)に洛北・松ヶ崎村(現在・京都市左京区松ヶ崎)に別邸・無盡庵(敷地約3600㎡)を築造し、その際に庭園の設計について雪佳に依頼した。大橋正之助と雪佳との関係については不明であるが、雪佳の活動分野が染色・織物などにも及んでいたことから、つながりができたものと推測される。「この庭園の作者は神坂雪佳という画家で」「創造当時の作者のスケッチが(中略)大橋家に残っている」⁸⁾とされたスケッチは、現在、所在不明であるが、大橋家では庭は雪佳が設計したと伝えるほか、無盡庵築造時期の雪佳の作品が所蔵されており(『御殿』明治40年、『残月』雪佳考案の硯箱・明治43年)、この庭園の設計に雪佳がかかわっていたのは間違いない。また明治42年(1909)4月18日~22日に行われた無盡庵落成披露の開庵式のうち、

図2 無盡庵開庵式(明治42年4月19日)

図1 無盡庵平面図

図3 無盡庵開庵式(明治42年4月19日)

4月19日の列席者の中に「神阪雪佳」の名が見えることから、このことがうかがえる。

さて、この庭園は現在も良好に保存されており、また作庭時の記録及び写真が大橋家に残っていることから、昭和2年(1927)に部分的な改修が行われているものの、作庭当初の庭園の姿がよくうかがえる。図面(図1)は昭和2年の改修後のものであるが、この改修の内容は座

敷前の池を浅くして流れ様にしたこと(現当主・大橋輝二氏談)で、このことはこの庭園に根本的な影響を与えるものではなかったし、この付近の当初の姿は開庵式の際に撮影された写真(図2)でよくわかり、雪佳らの構想がうかがえる。なお、同じ時に撮影された写真(図3)に見られる茅葺きの茶室は大正末に他所に移された。

図面(図1)からわかるように、この庭園には敷地の前後を流れる用水路から3つの経路で水が導入されている。そして、それらの水は、流れとして幅に変化を持たせながら、中央の大きな中島のまわりを巡り、西南部の池へとつながっている。外部から水を取り入れて庭園に利用することは、「植治」の南禅寺界隈別荘庭園群でもよく見られることで、またその水を流れとする手法、写真(図2、図3)に見られる比較的小ぶりの石を用いた護岸、池の中の浮石など「植治」の庭園との類似点も多い。このことは、雪佳が稲垣勝太郎の和楽庵をはじめとする「植治」の庭園に接していたことによるものと考えられる。ただ、この大きな中島は、「植治」の作例には見当たらず、雪佳がこの庭園の立地を考えたうえでの造景であったと考えられる。つまり、この庭園は回遊式であるとともに主屋東端の座敷からの観賞にも力点がおかれており、座敷から庭園を見たとき、左手(北)の松ヶ崎東山が中景、正面やや左手(東北東)の比叡山が遠景となるため、それらとの連続性を形成するうえで築山などの起伏を作ることが求められるが、雪佳は盛高の大きな中島の手法でこれを処理したわけである。このため庭園内の流れが部分的に隠され、回遊時の視点の変化に伴う景の変化に新鮮さが加わる効果をねらったものと考えられる。また茅葺の茶室を目立つ位置に置いていることは、敷地の相対的な狭さもあるが、そうした家屋を景の要素とするヨーロッパの風景式庭園からのアイデアであったことも考えられ、そうであれば雪佳の洋行の経験も大きく作用していると推察できる。

ところで前述したように、大橋家には無盡庵築造時の記録が残されている。それによると、当初用いられた植物材料の種類と数量は表1のとおりである。この表からうかがえることは、サクラ、ウメが多く、マツ、カエデなどと相まって大変はなやかな庭園であっただろうということである。ことに工事着手後間もない明治39年(1906)3月に桜74本(大30本、中24本、小20本)を植えていることは、近代の琳派とも言われる装飾的な画風を示した雪佳の意図が感じられ、注目に値する。また、モミ、トウモミ、コウヨウザンなどの使用は明治時代の特徴を示していると言える。なお、カナメモチの数がたいへん多いが、これは主として生垣に用いられたものである。

記録には、施工した植木屋や材料を納入した業者の名まで記されている。植木屋としては、「植木栄こと斎藤栄七」「植久こと北村久七」の名があるが、「植治」の名は

表1 無盡庵庭園に使用された植物材料

	明治39	明治40	明治41	明治42	計
	74本	11本	6本	3本	94本
リククラ	1224	7	95		1326
カナメモチ	79	32	51	1	163
カエデ類	62	13	57	1	133
マツ類	5	27	8		40
ウメ	17	35	14	1	67
モミ	25	170	32		227
スギ類	2	1	11		14
マキ	19	3			22
モッコク	33	115	10		158
カシ類	2				2
フジ	7		3		10
モクセイ	4		2		6
ミカン類	143	3	30		176
サザンカ	1				1
ツバキ	9				9
ナシ	9				9
シュロ					9
クスノキ		11			11
ツガ		10			10
モチ類		2	10		12
ヒバ類		1	6	3	10
アオギリ		4			4
サルスベリ		2			2
モクレン類		3	9		12
モモ		13			13
ユズリハ		1			1
トウモミ			16		16
コウヨウザン			10		10
イブキ類			45		45
モウソウチク			10		10
カキ			2		2
不明	10		5		15
ツツジ類	163	32	27		222
ヒイラギナンテン	4	15	15		34
ヤツデ	1				1
ハギ	34				34
ヤマブキ		4			4
イワヤナギ		53			53
ナンテン		28			28
トサミズキ		1			1
イワヒバ			3		3
コノテガシワ			38	40	78
クマザサ	46株				46株
被ボタン			2株		2
草花草取合せ	82				82
本シバ		10坪	35坪	6坪	51坪

ない。前述したように、雪佳が「植治」とは面識があったと考えられるにもかかわらず、この庭園の作庭に「植治」がはいっていないのは、雪佳がすでに名をなしていた「植治」を使ったのでは自らの構想を生かしきれないと考えたのではないかと推察しておきたい。

ともあれ、この無盡庵庭園は築造間もない頃から評判が高く、裏千家家元なども訪れている。したがって、雪佳がこのあと昭和13年に嵯峨有栖川の自邸の庭園を手がけるまでの間に、他所において作庭を行ったことは十分ありうると考えられるが、現在のところその例は見つかっておらず、今後の研究課題として残されている。

5. むすび

以上たどってきたように、明治～昭和初期にかけて多方面にわたって活躍した画家・神坂雪佳は、庭園にも並々ならぬ関心を示し、設計にかかわった無盡庵庭園では、雪佳らしい特色も出した庭園意匠を見せている。しかし、この庭園と晩年の嵯峨有栖川の自邸、少くとも現在確認できるものとしてはこの2つの庭園の作庭を行ったにすぎない雪佳をとりあげたのは、単にそれだけの事実を明らかにするだけでなく、京都の明治～昭和初期の庭園を考えるうえで画家の担った役割を指摘したかったからに他ならない。

この頃の京都の庭園について述べるとき必ず挙げられるのは、本論の中でもふれた「植治」小川治兵衛であり、たしかに無鄰庵、平安神宮神苑、和楽庵など彼の業績は大きく、いわゆる植木屋の域を脱して造園家の域に達した点も大きく評価されるところである。しかし、例えば南禅寺界限別荘庭園群において「植治」も施主層である政府高官・実業家・豪商など当時の有産階級からすべてをまかされて作庭を行ったわけではなく、彼らの注文や相談を受けながら仕事をしたわけであり、そこに施主層の好みなり構想なりが当然はいってくるわけである。そしてこれらの施主層は多く、美術愛好家でもあったことから、その美的ブレンとして画家とくに日本画家が大きな役割を果たしたことは想像にかたくない。したがっ

て、「植治」の作庭の中にも間接的に当時の日本画家の美意識が作用しているはずである。そのような日本画家の中には神坂雪佳のように自らも作庭にかかわる者も出てくることになる。

施主層の美的ブレンとして間接的に作庭にかかわることを一因として自らも作庭に興味を持ち、作庭するまでに至る画家がおり、それらの画家たちとまじわることによって作庭意匠上の影響をうける例えば「植治」に代表される職業造園家が存在する。このことが、京都の近代の庭園の水準を引き上げる要因の一つであったことは、是非指摘しておかなければならない点である。

本論では、神坂雪佳をとりあげたが、最初に述べた竹内栖鳳、橋本関雪さらにはその他の近代日本画家と庭園とのかわりについては、他日を期したい。

なお、本研究にあたっては、神坂雪佳の経歴と業績について京都市立芸術大学の榊原吉郎教授から直接多くの御教示をいただくとともに、編著書である『近代の琳派 神坂雪佳』(1981・京都書院)『神坂雪佳画囊』(1982・京都書院)を参考・引用させていただいた。また無盡庵の現当主である大橋輝二氏には、貴重な資料を提供していただくなど数々の便宜をはかっていただいた。ここに記して謝意を表する次第である。

文 献

- 1) 橋本関雪(1925): 家・関雪随筆(中央美術社): 195-201頁
 - 2) 榊原吉郎(1985): 雪佳と勝太郎・創造的市民7号14-15頁
 - 3) 海野弘(1981): 世紀末の街角(中公新書)57-79頁
 - 4) 光悦会(1916): 光悦(芸艸堂)177-180頁
 - 5) 佐々木邦博, 小野健吉(1983): 小川治兵衛の作庭に関する考察その1(58年度関西支部大会要旨)2-3頁
 - 6) 稲畑勝太郎翁喜寿記念伝記編纂会(1938): 稲畑勝太郎君伝725-732頁, 年譜1-31頁
 - 7) 湯本文彦(1909): 京華林泉帖(京都府)60-62頁
 - 8) 森蘊(1953): 淡交昭和28年12月号52-55頁
- 表1) 大橋家蔵「松ヶ崎別荘建築控」より作成 図1~3) 同家蔵図面, 写真

Summary : Sekka Kamisaka was the artist who played an important role in the artistic field in and around Kyoto from the middle of the Meiji Period to the early of the Showa Period. And he was interested in gardens. Mujin-an garden, which he designed, show the characteristics of his garden. At that time famous artist Seihoh Takeuchi, Kansetsu Hashimoto and so on were also interested in gardens and designed their own gardens. These artists' interest in gardens was one of the factors which raised the level of gardens of this period in Kyoto.